

研究ノート

戦時期の堺市立図書館 – 田島清館長の活動を中心に

竹田 芳則

(奈良大学 教授)

Sakai City Library During the World War II: Focusing on the Activities of Director Kiyoshi Tajima

By Yoshinori TAKEDA

(Professor of Nara University)

抄録

田島清 (1902～1982) は、1927 年大阪府立図書館に司書として就職し、1937 年に堺市立図書館の館長に着任した。彼が館長として在職した時期は、日中戦争の開戦 (1937 年) からアジア・太平洋戦争の敗戦 (1945 年) という困難な時代に重なる。そうした中で、彼は堺市において多様な人的ネットワークをつくるとともに、市民に「非常時」であるからこそ、図書館の役割が重要であることを訴えた。本稿では、この時期における堺市立図書館の活動について、田島館長の動向に注目して考察することとした。

Abstract

Kiyoshi Tajima (1902–1982) changed his occupation from a librarian at the Osaka Prefectural Library in order to become the director of the Sakai City Library in 1937. Japan was struggling when Tajima served as the Director, due to Japan's involvement in the Sino-Japanese War (1937) until its defeat in the Asia-Pacific War (1945). Director Tajima appealed for the importance of libraries at 'the time of emergency' and tried to establish many kinds of human networks in Sakai City. In this paper I tried to make an analysis of the services of the Sakai City Library led by Director Tajima.

はじめに

堺市立図書館は、1916 (大正 5) 年 6 月 15 日に、大阪府内で初めての市立図書館として開館した 1)。それから 100 年後の 2016 年、筆者は堺市立中央図書館の職員として『堺市立図書館 100 年史 – 1916～2016』の発行をはじめとする、100 周年記念事業の担当メンバーの中心となって関わることとなった。

同時に、堺市立図書館に残る主に戦前の同館の歴史に関わる資料については、中央図書館の市民ボランティア団体である「堺メモリー倶楽部」により、調査および資料整理が行われ、その成果は 100 周年記念事業の一つとして、市内各図書館を巡回して「堺市図書館 100 年のあゆみパネル展」を開催し、多くの市民が目にとることとなった 2)。

このなかで、特に注目されたのが、1916 年の開館前後の図書館をとりまく動向³⁾、および同パネル展では「発展期」と位置づけられた、1936 (昭和 11) 年の新図書館移転開館から 1945 年の戦災による本館焼失の時期である。日中戦争の開戦からアジア・太平洋戦争の敗戦という、困難な時代に重なる時期に、堺市立図書館 (当時の正確な名称は「堺市立堺図書館」) の館長をつとめたのが、田島清である。

本稿では、この時期の同館の活動について、田島館長の動向に注目して検討することとする。特に、彼が市民によびかけた図書館利用のありかたを紹介するとともに、それが、当時の図書館活動にどのように反映されたか考察する。

1 田島清の経歴と『回想のなかの図書館』

田島清は、1902 (明治 35) 年 8 月 22 日、大阪府泉南郡東鳥取村石田 (現・阪南市) で男 3 人兄弟の末っ子に生まれた。旧制府立岸和田中学校を経て、1926 (大正 15) 年 3 月に早稲田大学文学部仏文学科を卒業した。亡くなったのは、1982 (昭和 57) 年 4 月 16 日である⁴⁾。

田島は 1975 年 8 月に、当時、堺市にあった広文堂という書店より『回想のなかの図書館 - 中之島から宿院へ』という半生記を出版している。同書は、1927 年から 10 年間の中の島図書館、1937 年から 46 年にかけての堺市立図書館の貴重な証言記録となっている。本稿においては、特に注記のないものは、本書の記述によるものとする。

なお、同書出版当時、田島は堺市立図書館 (1971 年開館の新館) に非常勤職員として勤務しており、河盛安之介、我堂武夫の新旧市長をはじめ市の幹部や、郷土史家が発起人となって、1975 年 8 月 13 日に堺市民会館において「出版を祝う会」が開催された。このとき、世話人の先頭に立ったのが、当時の堺市立図書館長の栗原均である。栗原による同書の「推せん文」を以下に紹介する。

著者は、昭和二年大阪府立図書館 (現府立中之島図書館) に就職、のち転じて堺市立図書館長となり、戦後感ずるところあって職を去るまで二十年間一貫して公共図書館職員としての幅広い文化的活動を経験された。いまま市立図書館に非常勤の形で勤めながら、郷土資料の整備などに尽くされる、学究の老図書館員である。

当時、アメリカ社会を支配していたフーバー景気「エターナル・プロスペリティー」が一転して大恐慌になだれ込む直前、著者の言をかりると『陽の当たらない』図書館界に、大学を出たばかりの若い身空を沈め学問上の苦悩と生活の痛苦にゆらぐ十余年の中之島時代。殊に著者を含めた図書館員群像が鮮やかに書き出される。

室戸颱風後再建された堺市立図書館に、専任の初代館長として着任した著者は、新しい図書館運営にさまざまな苦心を重ねる、時あたかも戦争に傾斜する混乱期に際会し、文化機関としての図書館の使命と時代とのかかわりに、著者の苦悩と活躍が続く。

殊に、学問を通じて、歴史と文化に沈潜し、著者がこよなく愛する堺を画いた別冊「堺の史的幻影」は、その長い豊かな図書館生活から生み出されたもので、著者と不離の関係を持つという意味から一読をお奨めする次第である。

いま漸く、新らしい展開をみせようとしている大阪府の図書館界の史的道標として、本書を

通じて、老図書館員の歩んだ道を辿ることは、同職の後輩として意義あるものと思い、あえて各位のご購読をお奨めする次第である。

昭和五十年七月

大阪公共図書館協会々長

堺市立図書館長 栗原均

田島は同書のあとがきで「堺市立図書館長の栗原均氏が、著者と同じ経路を辿ってきたという親近感からか、つねに温い励ましの好意を示してくださった」と述べている。

実際、栗原館長は、田島館長の時代から 35 年の時を経て、大仙公園内に移転した新図書館 (現在の堺市立中央図書館) の開館後まもなく、田島と同じ経路で大阪府立図書館から堺市立図書館長に着任していた。戦後の高度経済成長が終焉を迎える激動の時期にあたり、新図書館では、栗原館長のもと『市民の図書館』にもとづく、貸出を重視する新しい図書館サービスを実践されていた。一方で、栗原は、堺市立図書館が戦前から戦災を乗り越えて守ってきた、貴重資料や郷土資料を大切に、田島という「老図書館員」を新図書館に尊敬をもって迎えて、整理にあたらせていたのである。

2 大阪府立図書館時代の田島清

田島は、大阪府立図書館に 1927 (昭和 2) 年に始まる巡回文庫の担当者として就職した 5)。その後、図書目録係主任、購入係を経て、35 歳で堺市立図書館長に就任している。

ところで、田島が就職して間もなくの 1928 年 3 月に、大阪府立図書館創立 25 周年ならびに今井貫一館長の在任記念を中心に約 160 名が集い祝典があった。しかし、この祝典の数日前に大騒動があった。同館の若い司書たちは、この際 25 年勤続の藤田弥太郎司書をも表彰すべきと訴え、募金の趣意書を回した。発起人の筆頭に中尾謙吉司書部長の名があった。青年図書館員聯盟 6) の主席理事を務めていた中尾は若手からの依頼でそうしたのであろう。ところがこの一件が、今井館長の逆鱗に触れ、中尾は面罵のうえ諭旨免職を言い渡された。若い司書たちは“連袂辞職”^{れんべい}覚悟で今井に中尾の免職撤回を訴えたが、そのまま免職は実行されたのである。

この事件については、今までほとんど知られていなかったが、最近になって志保田務氏により、青年図書館員聯盟との関係で明らかにされた 7)。『回想のなかの図書館』においては、免職された中尾司書部長は「中谷」司書部長として登場する。田島は「虫の哲学」を語る藤田司書に親近感を持つ一方、「本を読まないという中谷司書部長への反感」と今井館長への人間的尊敬の念を持っており、微妙な立場にあった。また青年図書館員聯盟に対しては「ここに集まっている図書館員の多くは、学歴が世間的に不利で司書にしてもらえなかった不平分子で、間宮氏の資力で出していた季刊雑誌『園研究』にそうした鬱憤をもらしていた。老文学士〔中谷〕はこの彼等の尊敬を集め、いつのまにかこの連盟の顧問格に祭りあげられていた。」「一方私がこの連盟について知っていたのは、連盟の雑誌で見たのだが。図書館という漢字を改造して園 (としょかん) という文字を創り出していることくらいだった」と述べている。

一方で、この問題で開かれた「市庁舎と図書館に挟まれた形であった豊国神社の社務所の座敷を借りて、司書全員の協議会」において、田島は「館長の無謀な処置を撤回させるには、我々が連袂辞職

の覚悟で館長に迫るべきだと思います」との強硬論を発言している。

3 堺市立図書館への着任

その後、9年経ったある日、田島は長田富作館長⁸⁾に呼ばれて、「堺市が今度新しい図書館を完成し専任の館長を推薦してほしいと言ってきたので君を推挙しておいた」「巡回文庫の経験者で小図書館の運営には適任であり、目録系の経験で大図書館の機構にも完全に習熟している、さらに購入係をつとめ図書の鑑別にも識見が高い、以上三点を理由に極力推薦しておいた」と告げられた。

田島が堺市に赴任したのは1937(昭和12)年の夏の終わりで、日中戦争が深みにはまっていこうとしている時期で、市内には兵隊の動きが激しくなり、戦時色が濃くなっていた。当時の図書館は、それまで宿院小公園の旧館が1934年9月の室戸台風で大破したのちに、その復興事業として、宿院町東三丁の顕本寺の境内の一角を借りて新築されたばかりであった。旧館は、1916(大正5)年の開館時の初代館長に大阪府立図書館の今井貫一館長が迎えられ、以来専任の館長がいなかった。堺市では、この新館落成を機に新たに専任の館長を迎えようという話になって、時の今西学事課長が府立図書館長に適当な人物の推薦を求めたことから、田島が赴任することになったのであった。

田島の赴任にさいして、市当局としては奏任待遇で館長兼司書の辞令を内申する予定であったが、手続きに時日を要するので、とりあえず大阪府に内申して知事の任命辞令をもらうこととなった。とくに「兼司書」としたのは、従来のように事務の都合で迎えた館長ではなく、図書館畑の玄人であることを学事課が誇示したかったからのようだ。こうして田島は、昭和12(1937)年9月15日付で、月俸95円の知事辞令をもらった。その年の暮、つづいて「高等官8等、年俸1,310円」というあまり例のない低い待遇で「公立図書館長兼司書ヲ命ズ」という内閣辞令を受けた。

4 目録整備と人的ネットワークづくり

田島は、図書館長に着任すると、まずは目録の整備にとりかかった。旧館の開館時から勤務している河野文吉という司書がおり、目録を管理していたが、叢書類も分出しておらず、分類もはなはだお粗末であった。それで田島は、職員の勤務シフトを変更して、日勤職員に午後の3時間で叢書類の分出方法を教え、書名分出カードを作成させた。

さらに田島は、「図書館というところは書物を貯えていさえばよいと考えている学事課の人たち」にも目録の必要性を教えなければならなかった。そこで「時局を反映した新刊書の一枚物の目録」の月報を作成し、役所の通送便を利用して市内の小学校その他に配布した。このことは、のちに冊子目録の印刷刊行の予算確保につながっていくのである。

ところで、田島が着任の辞令交付に市役所に行くと、学事課長から「図書館長も他的高级職員の例にならない赴任時には人力車に乗って市中の有力者や議員の面々に挨拶をしてまわらねばならない」と言われて、そのようにするとともに、就任の挨拶状を各方面に出すなどしている。

田島の挨拶状をみて、以前から知己であったNHK大阪放送局の社会教育課長が連絡をしてきて、ラジオのローカル番組として田島の講演を企画した。「日本精神の文献巡り」と題された講演は好評

で、堺市民のなかにも「今度来た図書館長はおもしろい考えを持っている」と、わざわざ田島を訪ねてくる人々もあった。そのなかには、全国水平社創立メンバーの一人でマルクス主義者の泉野利喜蔵などもいた。また、当時堺市内には複数の地方新聞があり、その記者の訪問を受けることが多かった。

そのうちに、郷土史家がつぎつぎと図書館を訪ねてきた。彼らは、むかし堺に史談会があったことを懐かしみ、同会の復活を望んでおり、図書館は市の文化の中心であるべきと考えていた田島は、幹旋役を引き受け、河野司書が世話役となった。この会では、堺出身の劇作家食満南北^{け まなんぼく}を招いての講演会などが企画された。

しかし、その後も史談会の中ではいろいろの議論がかわされたが、次の計画はいっこうに定まらず、会の運営はすぐに行き詰まってしまった。市当局の人たちからは「あなたはうるさい人たちのお守り役で迷惑でしょう。あまり深入りせぬほうがよろしいですよ」とアドバイスされた。

一方、館内の整備が緒につきはじめたころ、市の水道課に勤める吉田一重という青年が、田島を訪ねて夜間の集会を持ちたいと言って、市役所の同僚や堺中学時代の友人たちを仲間に入れ、一種の読書グループをつくりあげた。泉野利喜蔵の紹介で、未解放部落の青年たちも加わった。自然発生的に固まってきたこの読書グループに、田島は「芸友会^{うんゆうかい}」と命名した。日本最初の公開図書館とされる、石上宅嗣^{いそのかみのやかつぐ}の「芸亭^{うんてい}」からとったものである。

その後、時勢の圧力が強くなるにつれ、芸友会の会員の中でも、我らなにを読むべきかとのあせりが強かった。田島は、岩波文庫の『国富論』をテキストとして講読してみたらと提案したが、会員たちにはアダム・スミスは魅力がなく、むしろマルクスの『資本論』をとりあげるべきだとの意見もあり、会員の古家仙之助^{こげ}がレポーターをつとめていいと言った。田島も早稲田の第一高等学院時代に佐野学の講義を聴いたことがあったのだが、講読のリーダーになるだけの自信もなかった。結局、一番手近にある『堺市史』の講読会を行うこととなった。この『資本論』の講読会は、のちに実現し、古家がレポーターとなって、みんな熱心に勉強していたが、太平洋戦争がはじまると、図書館でマルクスの勉強をしているといううわさが広まり、役所から注意を受け、中止することとなった。そのころには、芸友会の青年たちも次々と召集され、大部分姿を消していった。

また田島は、着任の翌年度の昭和 13 (1938) 年度には図書購入費予算を倍増させることを、自らの課題とした。堺商工会議所の元老格で、福助足袋の社長辻本豊三郎から、図書館への援助資金獲得活動を行いうる有力な候補者として、酒造家の鳥井伊三郎ら二人の青年実業家を紹介してもらった。田島は二人を大阪商科大学の図書館や西宮市立図書館に案内し、西宮市立図書館と西宮の財界との結びつきや、同館に酒造関係の文献が整備されている実情などを紹介するよう努めた。

こうした田島の、市民からの寄付に頼って図書を充実しようというねらいは、実際にはそれほどうまくは行かなかった。しかしながら、図書館を拠点とした人と人との交流の場づくり、また地域の産業支援に役立つ図書館づくりといった田島の構想は、現代にも通じる極めて先見性に富んだものであったといえるだろう。その構想を文章化して、市民へのアピール文としたのが、次に紹介する「図書館再認識のため市民に告ぐ」である。

5 「図書館再認識のため市民に告ぐ」について

新館開館後の実質的に最初の年度である昭和 12 (1937) 年度からは、ガリ版刷りの『堺市立堺図書館年報』が作成され、統計や事業概要が掲載された。特に田島着任後の昭和 13 年度からは、活版印刷となり、より市民への図書館事業の周知を目的とする冊子となった。

その『堺市立堺図書館年報 自昭和 13 年 4 月 1 日至昭和 14 年 3 月 31 日』には、「附」として、無署名で「図書館再認識のため市民に告ぐ」というアピール文を、6 ページにわたって掲載している。さらに、当時、堺市櫛屋町大道で発行されていた日刊紙『和泉日日新聞』1939 年 6 月から 7 月にかけての紙面に、ほぼ同じ内容のものを、全 8 回の連載コラム「図書館を再認識せよ」として、こちらは「堺市立図書館長 田島清」の署名で掲載されている。

以下、その概要について紹介する。

一 図書館教育の意義

1 学校教育と図書館教育

学校教育のみが教育ではなく、学校外の教育が考えられるべきである。しかし一般の社会教育は臨時の学校教育ともいうべきであり、図書館教育は、これとも区別されて、学校教育と対等の地位を占め、学校教育と共に、教育の両輪をなすものである。

2 読書の意義

文明文化は個人の孤立的な努力では作り得ず、その前提として、過去及び周囲の文化吸収ということが不可欠である。文化吸収の手段には様々あるが、読書に比べて、量的にも、質的にも到底匹敵すべくもない。即ち読書は文化建設の上に、セメントの役目をなしているのである。

3 図書館の機能

書店の図書群はよく売れることを目標にしているが、図書館の図書群は、文化財としての価値によって選ばれており、書店と図書館との蔵書には本質的な相違がある。更に図書館においては、こうして選択された文化財は、分類技術・目録技術によって、体系化されている。図書館は、読書という偉大な教育的事実を、より適切に、より能率的ならしめるための、継続的、合理的な機関なのである。

二 図書館利用のすすめ

1 市民の調査部としての図書館

特に強調したいのは、調査部を持たない商工業者の図書館利用である。図書館において、自己の製品・商品・販路等に関し、必要に応じて調査することは、自己向上のために必要である。

2 修養の道場としての図書館

近来、「汗の教育・行の教育」を礼賛するあまり、知識教育を否定する傾向がある。しかし学校教育で教え込む知識は「頭で解る」程度に終わることがあるが、図書館で自主的に獲得され

る知識は、自己の生活の欲求に即して、労苦し反覆熟読して始めて獲得されるのであるから、血となり肉となり信念となる知識である。自主自力による刻苦を要するという点で、図書館は「窄き門」ではあるかも知れないが、「窄き門」なる故に、真の修養道場と言い得るのである。

3 智能の向上・学術の研究

智能の向上は、この非常時日本においては、国家のために必要であり、時に日本の重工業の一部を背負っている堺の産業戦士に、この感が切実でなければならない。激しい労働の余暇に、旋盤や機関^(ママ)の書を熟読する多くの職工を見ることが更に増大してよいと思う。

4 慰安場としての図書館

図書館を慰安場として、芸術的・趣味的なものを読むことも、決して拒否しない。小説その他趣味的な図書を読むことは、直接の功利を持たないように思われるが、実は、その人の知性・感受性は訓練を受けて、品性の洗練がなされるのである。非常時日本は軍事的にも経済的にも、絶対に強大であると同時に、国民の教養の高さ、品性の洗練も他に対して大きい力となる。

以上、図書館を独立した教育機関として市民の利用法を説明した。次に学校・青年学校・授産所・青年団等の教育機関が、図書館と連繋して、その効果を向上させねばならないことについて説明する。

現在図書館を学校教育の必須条件としているのは、大学教育ないし専門学校教育だけである。一方、今回義務制となった青年学校の訓練要目には読書の一項が作られたが、一般には単なる抽象に終るのではないかと思われる。読書教育を具体的に実現するには、単に普通学科に限らず、職業科においても、自主研鑽の教材となる各段階、各部門に応じた図書群や種々の辞典が必要であり、当然図書館と連繋しなければならない。財的にいっても、附設の図書館を持ち得ない青年学校や中等学校等は、図書館と連繋しなければならないのは当然である。

以上が、田島の「図書館再認識のため市民に告ぐ」の概要である。

ここでは、図書館は単なる社会教育の一施設ではなく、学校教育と対等の位置をもつものであり、学校教育との連携が重要であること、現在の「非常時」であるからこそ、堺市民の生活や仕事に役立つ場としての図書館が重視されねばならないことなどが主張されている。これは現行の「図書館の設置及び運営上の望ましい基準」(2012年)の「学校等の教育施設との連携」「地域の課題に対応したサービス」といったことにも通じるものと言え、田島の先見性を表すものといえよう。

6 堺市立図書館の重点事業

前章でふれた『堺市立堺図書館年報』であるが、昭和12(1937)年度から昭和17年度までが残されており、各年度の統計や事業内容を知ることができる。同年報の冒頭には「行事摘録」という欄があり、各年度ごとの重点事業がトピックとして簡条書きされており、以下それを紹介したい。

昭和 12 年度

- 事変下 (日中戦争) の財政危機による図書購入費の不足のため、市民に図書寄贈を呼びかけ。
→新規蔵書受入冊数 1,492 冊中 615 冊 (41%) 寄贈者 (個人・団体) 120 名
- 蔵書目録の整備に着手。
- 産業都市としての堺市の実状に即し、「職工諸子」の知識技能の啓蒙・研鑽のため数学、工学、工業の図書充実、商工業者の経営上の実務的利便のため各種名簿其他の資料を収集。
- 郷土資料の積極的収集、整理。堺市史史料の市当局からの移管。
- 堺市連合青年会による青年読書修養会の組織、活動への支援。
- 全館に「防空遮蔽」の装備、防空演習中も開館して「空襲下ノ読書」を標榜
- 参考資料目録 (ブックリスト) を「時局資料号」「日本精神昂揚号」として各方面に配布。

昭和 13 年度

- 本年度より館外貸出を実施。実効を挙げる。
- 冊子目録 (教育、文学の一部、工学・工業) を刊行、各方面へ配付。
- 小学校国定教科書の「図書館」の項目の機会を利用して、市内小学校尋常 5 年担任教員数十名の参集を求め、「図書館ノ概略及該教材ニ関スル注意事項」を説明、続いて月末休館日を利用して、市内小学校 10 校 2,500 名の児童が図書館を参観して、館長が簡単な講話を行った。
- 図書館が「母胎」または積極的に協力して活動しする学術または修養団体は以下のとおり。
①堺連合青年団読書修養会 ②文化講習会 (小学校教員中心古事記講座) ③堺史談会 ④読書会 (堺市吏員有志中心) ⑤堺童話教育研究会

昭和 14 年度

- 冊子目録 (歴史) を刊行。
- 小学校国定教科書「図書館」との連携。登館校数 12、児童数約 2,600。
- 堺市銃後奉公会に協力、図書館で「堺市戦歿将兵遺芳展」を開催
- 「国民精神総動員文庫」を市内公立青年学校に廻付、実施。
- 図書館利用状況調査票 2,000 枚を各方面に配布、市民各層の図書館利用動向を調査
- 本年度中の図書館が協力の学術・修養諸団体
①堺市連合青年団読書修養会 ②小学校教員古典研究会 ③堺史談会 ④読書会

昭和 15 年度

- 冊子目録 (伝記) を刊行。
- 小学校国定教科書「図書館」との連携。登館校数 13、児童数約 2,640。
- 「堺市科学振興会」成立、図書館を事務所とし、種々の事業中、科学文献の充実運営を分担。
- 辻本英一 (福助足袋) 寄附により二千六百年記念図書館充実資金壹萬円を設定。
- 本年度中の図書館が協力の学術・修養諸団体
①堺市連合青年団読書修養会 ②堺市科学振興会 ③青年読書会

昭和 16 年度

- 冊子目録 (地誌), (政治, 法律, 経済, 財政, 統計, 社会, 風俗, 家政, 兵事), (数学, 理学, 医学), (産業, 商業, 交通), (美術, 諸芸, 娯楽) を刊行
- 本年度中の図書館が協力の学術・修養諸団体
 - ①堺市連合青年団読書修養会 ②堺市科学振興会 ③青年読書会
- 「未曾有ノ時局下ニ於テ一日一時間モ閉館ヲ余儀ナクセルコト無カリシハ特記スベキコトナリ」

昭和 17 年度

- 冊子目録 (文学・語学)(宗教・哲学) を刊行
- 長尾眞一郎の寄附により科学文献・共栄圏資料等を中心に興亜資料長尾文庫の蒐集に着手
- 「本年度中館内閲覧人ノ減少ニ反比例シテ館外帯出閲覧ノ著増ヲ見タリ」
- 本年度中の図書館が協力の主要な文化諸団体
 - ①堺市科学振興会 ②堺芸術報国連盟 ③芸友会 (旧読書会)

以上から、年度ごとに、特徴的なトピックについてふれていきたい。

昭和 12 年度の事業に関しては、田島新館長の着任と日中戦争開始が重なったこともあり、時局にあわせたユニークな取組が注目される。産業都市としての堺市の実状にあわせた「職工諸子」のための資料や商工業者の経営上の実務的利便のための各種名簿等の収集など、現代でいう「ビジネス支援サービス」に着手している。また、全館に「防空遮蔽」の装備、防空演習中も開館して「空襲下ノ読書」を標榜したという 9)。

昭和 13 年度からは館外貸出サービスを開始している。以後、戦争の激化にもかかわらず、昭和 17 年度まで毎年貸出冊数が増加していることが注目される (表 1 参照)。

表 1 堺市立図書館利用状況 (1936～1942)

年度		蔵書 冊数	閲覧冊数			閲覧人員			開館 日数
			館内	館外	計	館内	館外	計	
1936	昭和 11	13,243	46,393	0	46,393	0	26,091	26,091	105
1937	昭和 12	17,735	108,069	0	108,069	0	67,112	67,112	333
1938	昭和 13	18,059	112,988	3,155	116,143	66,943	1,587	68,530	333
1939	昭和 14	20,860	119,247	5,077	124,324	61,609	2,562	64,171	332
1940	昭和 15	23,615	137,471	8,285	145,756	65,494	4,390	69,884	332
1941	昭和 16	27,855	132,361	13,071	145,432	60,970	6,343	67,313	338
1942	昭和 17	30,601	95,780	13,918	109,698	43,577	6,889	50,466	338

(『堺市立堺図書館年報』昭和 12 年 4 月～昭和 18 年 3 月による)

また、この年から小学校教科書「図書館」と連携して、市内小学校 5 年の担任教員を図書館に参集させて説明会を開催し、続いて月末休館日を利用して、市内小学校 10 校 2,500 名の児童が図書館を

参観して、館長が簡単な講話を行っている。同様の事業は現在も毎年、堺市の各図書館において、小学3年生を対象に行われており、興味深い取組である10)。

昭和14年度においては「図書館利用状況調査票2,000枚を各方面に配布、市民各層の図書館利用動向を調査」という事業が報告されている。残念ながら、その調査結果は残っていないようであるが、非来館者も含めた対象に、図書館利用動向を調査したものと思われる。

昭和15年度においては「堺市科学振興会」の設立が報告されている。これについては後述する。

太平洋戦争開戦前後の時期にあたる昭和16年度には、「未曾有ノ時局下」において「一日一時間モ閉館ヲ余儀ナクセルコト無カリシ」ことを特筆している。その背景に、図書館サービスが「不要不急」の事業として、休館や時間短縮を求める圧力があつたことも想像される。

昭和17年度には、館内閲覧者の減少があつた一方で、館外貸出人数が反比例して増加したことが報告されている。先述のとおり、館外貸出サービスは、田島が館長着任後まもなくの昭和13年度から開始したサービスであつた。「非常時」の図書館利用が困難な状況において、(館外)貸出はより有効なサービスであつたことを示しており、興味深い。

7 堺市立図書館の利用者および蔵書利用動向

次に、同様に『堺市立堺図書館年報』から図書館利用者の職業の傾向を見たのが表2である。

表2 閲覧人職業別表(人数)

職業/年度	昭和12	昭和13	昭和14		職業/年度	昭和15	昭和16	昭和17
官公吏	868	885	1,266	俸給生活者 労働者	官公吏	1,671	1,470	1,194
教員	642	862	851		教員	1,426	1,197	940
記者、著述家	112	46	31		会社員	2,892	2,969	2,786
					工場	6,583	6,400	5,167
					雑役	399	397	455
					店舗	1,072	1,013	551
実業	2,728	2,203	1,194		実業	1,340	703	614
					農牧	190	112	98
雑業	12,516	11,519	13,529		雑業	1,968	1,550	1,421
職業不明	9,476	9,695	4,871		不明	4,025	3,570	2,578
女子	1,716	1,822	2,626		婦人	3,642	2,986	2,938
学生	17,725	19,842	18,781	学生	大学専門	4,631	6,812	6,800
					中等学校	18,416	19,583	16,939
児童	21,329	21,656	21,022		小学児童	21,629	18,551	7,985
合計	67,112	68,530	64,171		計	69,884	67,313	50,466

昭和15(1940)年度以降では、それまで一括されていた「雑業」を細分化していること、同様に

「学生」を大学専門学校生、中等学校生に分けていることなどがわかる。

全体としては、小学生と中等学校生の利用が多いが、昭和 15 年度以降は、工場労働者の項目を立てていることからわかるように、当時「産業戦士」とよばれた工場労働者をターゲットにしたサービスを意識していたことが見てとれる。

このことは、表 3 の「閲覧図書類別表」からもわかるように、昭和 15 年度以降に「数学、理学、

表 3 閲覧図書類別表 (冊数)

類別/年度	昭和 12	昭和 13	昭和 14	昭和 15	昭和 16	昭和 17
神書, 宗教	807	539	579	731	649	920
哲学, 教育	2,233	2,818	2,571	4,157	5,766	5,208
文学, 語学	12,406	13,966	13,379	17,374	21,222	17,501
歴史, 伝記, 地誌	5,819	6,459	6,536	9,158	10,638	9,751
政治, 法律, 経済, 財政 統計, 社会, 家政, 兵事	5,604	5,943	5,982	8,348	10,378	9,744
数学, 理学, 工学	7,931	8,952	9,759	13,703	19,954	18,639
医学	817	1,002	695	1,184	1,178	1,019
産, 工, 商業, 交通	2,730	3,549	3,443	2,955	2,430	2,304
美術, 諸芸	1,795	1,762	1,617	2,179	2,494	2,216
総記, 堺史料	6,626	7,012	6,017	8,200	7,268	6,700
児童図書	42,395	43,580	44,222	48,018	36,790	15,622
官公報, 雑誌, 新聞	18,906	20,561	29,524	29,749	26,665	20,074
合計	108,069	116,143	124,324	145,756	145,432	109,698

工学」の分類図書の利用が激増していることに表れている。また、さらに次章で紹介する田島による「堺市科学振興会」の設立が大きく関係していると思われる。

8 科学振興会と芸術報国連盟

日中戦争開戦直後、1937 (昭和 12) 年 8 月「国民精神総動員計画実施要綱」が閣議決定され、翌月内閣訓令と訓示が発せられたのを機に、国民精神総動員運動が開始された。1939 年 5 月の第 33 回全国図書館大会には「東亜ノ新秩序建設ノ国策ニ鑑ミ図書館ノ採ルベキ具体的方策如何」が文部大臣によって諮問された。図書館側からは館界の総力をあげて国策の遂行にあたる姿勢が示された 11)。

1940 年 10 月大政翼賛会が発足し、国内では「新体制」の確立が急務となった。図書館界においてもこの動きに乗り遅れまいとして、1941 年 3 月、全国図書館大会に代わって開催された「第 1 回全国図書館総合協議会」は「高度国防国家体制に於ける図書館の地位及機能如何」を協議題にとりあげた。そこでは「図書館ハ新体制下ニ於ケル国策ノ研究宣伝ノ第一線機関ニシテ又最モ重要ナル国民再教育ノ道場」であることが確認された 12)。

この頃の心境を田島は『回想のなかの図書館』で、次のように語っている (p.168)。

国内における精神運動も昂揚の一途をたどった。こうした精神運動の推進者のように見られていだけに、私はみずからの立場を苦々しく感じないわけにいなかった。「みそぎ」の錬成に浮身をやつしたり、「天皇陛下」と発音するたびに姿勢を正す、というよりむしろしゃちほこばってみたり、仁徳陵の東側を阪和線が通るさい乗客がいっせいに立ち上がって遙拝したりするさまは、正気の沙汰とは思えなかった。こんな風潮で日本の運命を打開できるなど思うのはどうかしてゐるではないか。私はかねがね科学運動のイニシアティヴをとらねばならぬと考えていた。

田島は、堺に来てからのネットワークを活かして、市役所内などに理解者を得ながら、科学運動の組織組織づくりを進め、河盛安之介市長に会設立の趣旨を説明して、会長への就任を依頼した。田島が主導して、1940(昭和15)年10月、河盛市長を会長に「堺市科学振興会」の発会式が執り行われた。同会会則の第一条では、「本市民ノ科学的知識並ニ其ノ応用技術ノ向上ヲ図リ以テ科学日本ノ建設ニ資スルヲ目的トス」とし、第二条で「本会ノ事務所ハ当分ノ間市立図書館ニ置ク」とされている¹³⁾。

主な事業として、小学校教員に対する科学再教育(講習会・工場実習)、小学校・国民学校における理科教育の研究補助、発明考案品の募集、家庭婦人科学講座、自動車講習会、各種講演会・展示会の開催などのほか、滑空機(グライダー)練習も行われた¹⁴⁾。また、科学振興会の予算で購入した図書は図書館に寄託されたので、図書館としては科学文献の購入に十分な余裕ができるというメリットもあった。

こうした科学振興会の成功を見ていた大阪毎日新聞堺支局長が、田島を訪ね、今般、美術家・音楽家・文学者を糾合して「堺芸術家報国連盟」を結成することになったので、理事長になって尽力してほしいと依頼した。自らが芸術家の仲間入りをするに違和感のあった田島は当初辞退したが、説得に応じ理事長となり、事務所を図書館に置き、河野文吉がこれに当たることになった。また書記長には、堺市役所にいた詩人の安西冬衛が就いた。堺芸術報国連盟は、1941年6月に結成式を行い、綱領・規約などを決定した。綱領では「我等は皇道精神の本義に徹し和衷協力以て興亜の大業を翼賛し奉らん事を期す」とされ、戦意昂揚目的の色彩の強いものであった。

堺科学振興会も堺芸術報国連盟も、田島の意図とは別に客観的にみれば、あらゆる国民を戦争目的に動員するための組織の一つであったと言わざるをえない。このことが、最後にふれる田島の戦後の行動にも関係していると思われる。

9 空襲と図書館

田島の卒業した早稲田大学の教授であった津田左右吉が『古事記及び日本書紀の新研究』などの著作により、不敬罪で有罪と定まったというニュースが入り、かねてより津田の著書に傾倒していた田島は大きな衝撃を受けた。市立図書館にもさっそく警官がやってきて津田の著書を押収して帰った。同じころ、金岡に駐屯していた憲兵隊の上等兵か伍長かがやってきて、『日本地理風俗大系』を閲覧し、こういう地理文献は防諜上害があるので押収すると言った。田島はただちに憲兵の申出を拒否し

て、「図書館の文献を防諜上公開してはならぬなどといった問題は一憲兵が云々することにはあらず、必要とあらば陸軍大臣と文部大臣の間で交渉の上決すべきものである。当方としては文部大臣の指令がないかぎり貴官の命に服することはできぬ」と主張したところ、憲兵は不満そうな顔をして立ち去った 15)。

1943 (昭和 18) 年 2 月、ガダルカナル撤退を転機として、日本の敗勢はもはや動かしがたくなり、本土空襲は必至の情勢となった。堺市においても 1944 年 6 月に建物疎開の実施が決定され、同年 9 月から第 1 次疎開として、1,364 戸の家屋が撤去された。さらに翌 45 年に入ると、第 2 次から第 5 次にわたって間引き疎開が行われ、第 1 次からあわせて合計 3,620 戸の建物が撤去され、住民 11,846 人も立ち退きをよぎなくされた。建物疎開によって変貌する市内の風景を文章と画にして記録にとどめることを、堺市が堺芸術報国連盟に委嘱した。同連盟理事長の田島も自ら「宿院通」という文章を残している 16)。

一方、図書館では灯火管制下でも、夜 9 時までの開館を維持し、読書ができるように窓に工夫をこらした。また空襲から、蔵書を守る対策もたてられた。書庫は鉄筋 3 階建て、窓は砂入りの小さい鉄扉で覆われていたが、木造の閲覧室が焼けた場合、鉄筋と木造を遮断している鉄のシャッターが万一火熱で溶けたりすると、関東大震災のおり東大の図書館が焼亡したように、シャッターのところが焚き口になって、中の蔵書に燃え移ることが予想された。そこで田島は、当時は貴重品扱いのセメントを土木課から調達し、全職員が疎開跡で拾い集めた煉瓦から書庫の一階に防護壁を作るよう、業者に依頼した。

そんな折り、芸友会の一人であった古家仙之助の父、太郎兵衛から仙之助の応召により、先祖伝来の蔵書約 3,000 冊の寄贈を受け、「古家文庫」と名付け受け入れた。そのうちに府立図書館では貴重書をトラックで田舎に運んでいるとの話が田島に伝わり、古家文庫などの貴重書だけは、現在の堺市西区にある家原寺まで運び経蔵に預かってもらうこととした。

1945 年 7 月 10 日未明の堺大空襲で、書庫をのぞいて館舎はすべて焼失した。焼け残った書庫はすぐ扉を開くと燃え上がる可能性があるため、10 日間待って防護壁を外した。息をのんでシャッターを開けたところ、蔵書はすべて無事であったことが確認され、館員たちから歓声があがった。館員の「文化」に対する愛情と情熱が、あの戦禍から図書館の命ともいふべき蔵書を守り、それは次代へと送りつがれてゆくこととなったのである 17)。

10 敗戦

1945 (昭和 20) 年 8 月 15 日正午の「玉音放送」を、田島は堺市役所の議事堂で聴いた。泉南に疎開していた家族を迎えにいった後、田島は辞表を書いて河盛安之介市長に会いに行った。しかし、河盛は「敗戦は君の責任ではない。いま辞めて責任をとるより、ちゃんと後始末をすることだ」と言って、辞表を受け取ろうとしなかった。

「後始末」という命を市長から受けた田島は、図書館の職員を集め、トラックを仕立て、家原寺に疎開しておいた図書を取りに行った。書庫も無事であったことから、図書館の蔵書については、巡回文庫として貸出していた 100 冊余りの一般図書を除き損害がなく、あの戦禍の中からとにもかくにも

これだけの書物を守り通せた喜びを田島は、今さらのようにしみじみと味わった。

科学振興会については、創立当初の田島の意図がどうあれ、高度国防国家の建設などを標榜してきたこともあり、田島は当然解散すべきと考え、会長である市長に具申し、経理の整理を進めた。しかし、科学振興会は解散されず、理科教育研究所と名を変えて生き残り、のちの科学教育研究所の前身となった18)。一方、田島が理事長をしていた芸術報国連盟は、書記長であった安西冬衛が手際よく解散の手続きをとった。

敗戦翌年の1946年2月、政府は戦時中に超国家主義と侵略的政策遂行の中心となった指導者を重要公職から追放する「ポツダム政令」を交付した。これを受け、翼賛会推薦代議士でもあった河盛市長もその対象になるとされ、同年5月の任期満了時に退職した19)。河盛市長に慰留されていた田島も、同年11月5日をもって依願免官の辞令が交付された。

その後、田島は東京の長兄が創設した電線会社の重役となって、大阪支店を開き実業界に転じた。10年にわたり「中小企業者の惨苦を嘗めた」後、堺市役所に復帰し、1955年には堺市議会図書室長となっている。そのあたりの経緯は『回想のなかの図書館』ではふれられていないのでわからないが、1955年4月の市長選挙において、河盛が9年ぶりに市長に返り咲いている20)。田島と河盛の関係からみて、田島の市役所復帰は、おそらくそのことと関係があると思われる。

おわりに

田島清(1902～1982)は、大阪府立図書館の司書から35歳の若さで、新館が開館したばかりの堺市立図書館の館長に着任した。彼は、市役所庁内に図書館への理解者をつくることに努力し、また、図書館利用者の若い人々を「芸友会」に組織し、彼らの知的向上を支援しながら、人的ネットワークを拡げていった。

一方で、田島が館長を勤めた時期は、日中戦争の開戦からアジア・太平洋戦争敗戦という、図書館活動においても非常に困難な時期に重なっていた。そうしたなか、市民に対しては、図書館は学校教育と双璧をなす教育機関であり、また市民の「課題解決支援」の役割など、非常時だからこそ図書館の機能が重要であると訴えた。

また古代史に造詣の深かった田島は、皇国史観がはびこる風潮を快く思わず、市民が科学的なものの見方をできることをめざし「堺市科学振興会」を自ら中心になって設立した。これは、戦時中の「高度国防国家建設」などの国策とも合致し、多くの資金を集め、図書館には科学技術分野の蔵書の充実をもたらし、「産業戦士」たちの図書館利用にもつながった。一方で、憲兵による蔵書の排除要求に対して拒否するなど、田島は理不尽なことに毅然と立ち向かった。

さらに戦争が激化し、灯火管制が行われるなかでも、夜9時までの開館を維持し、むしろ開館日数を増やして、市民の図書館利用をぎりぎりまで保障した。空襲被害が目前に迫ってくると、田島は自らの庁内ネットワークを活用して、セメントを調達して書庫の防護壁を築き、また貴重書の郊外への疎開を行って、大空襲による焼失から蔵書を守りぬいた。

こうした戦時中の田島の行動は、未曾有の困難な時期の図書館長として、最大限に努力したと評価できるが、一方で、図書館を「科学振興会」や「芸術報国連盟」の拠点としたことは、客観的にみれば

ば戦時の国策に積極的に協力したともいえよう。

戦後の「後始末」を終えた田島は、ポツダム政令により公職追放となった河盛市長のあとを追うように、図書館を去った。それは田島にとっての「戦争責任」のとりかただったのかもしれない。

付記

本稿は、2022年8月27日に大阪府立中之島図書館において開催された「令和4年度第5回図書館を学ぶ相互講座」(日本図書館研究会図書館学資料保存研究グループ2022年8月研究例会と共催)とした発表した「戦前から戦中期の堺市立図書館: 田島清館長の活動を中心に」の内容を再構成して原稿化したものである。最後に、個々のお名前をあげることは控えさせていただくが、同講座参加・関係者をはじめ、ご協力いただいた多くの方々に深く感謝申し上げたい。

注

- 1) 堺市立図書館の開館に至るまでの前史を見れば、日露戦争開戦から間もない1904年4月、堺高等小学校卒業生の同窓会である櫻友会おうゆうかいが、校内に設けた櫻友文庫に遡る。翌年には「戦捷記念堺図書館」に発展、1911年7月には、大阪府立図書館や財界からの支援を受け、「私立堺図書館」として、開館式が挙行された。
- 2) パネルの内容については、1971年以降を各区の図書館職員が作成したものも含め 堺メモリー倶楽部『堺メモリー倶楽部の活動記録: 100周年の堺市立図書館と私たち』堺メモリー倶楽部、2017, 56p. に掲載されている。また、堺メモリー倶楽部の活動については、拙稿「市民とつくる地域資料サービスの可能性」『みんなの図書館』(492), 2018.4, p.2-8. を参照。
- 3) 1916年の開館前後の堺市立図書館の業務日誌については、堺メモリー倶楽部の活動を顧問として指導した島田克彦氏により、詳しい解説とともに翻刻されている(島田克彦「歴史のなかの堺市立図書館:『大正5年5月以降/日誌』の紹介」『堺研究』(39), 2017, 巻頭2p, p.1-77.)。
- 4) 田島清の長男、田島陽太郎氏(1939年生・堺市在住)からの聞き取りによる。清の長兄の守保氏は東京で電線加工会社社長を経て、1955年に国立町長、のち初代国立市長となった人物である(田島守保『町づくりと先達』学陽書房, 1971)。また清は6人の子(うち2人は夭折)をもうけている。長男の陽太郎氏は、府立岸和田高校から東京大学工学部機械工学科を卒業して、八幡製鐵(新日鉄)に勤めた。次女(故人)は、早大院を経てフランス文学者であり、白井愛の筆名で作家としても知られる。
- 5) 日本図書館文化史研究会編『図書館人物事典』日外アソシエーツ, 2017, p.167. 「田島清」の項目による。
- 6) 大阪市内で図書館機器商を開業していた間宮不二雄が、1927年に大阪市に設立。自ら主宰者となり1928年、機関誌『團研究』を発刊。日本図書館協会の「活動方向との対立を意識して専門職としての図書館員個人を全国的に結集」しようとした。戦後に日本図書館研究会(日図研)として1946年復活。

- 7) 志保田務「日本の図書館組織における専門職団体としての矜持と溶解(後編)」『Journal of I-LISS Japan』1(2), 2019.3, p.3-21.
- 8) 長田は、1933年9月30日、大阪府立図書館の創設以来30年間館長職にあった今井貫一が勇退し、二代目館長として就任した(『中之島百年-大阪府立図書館のあゆみ』編集委員会『中之島百年: 大阪府立図書館のあゆみ』大阪府立中之島図書館百周年記念事業実行委員会, 2004, p.129.)
- 9) ちなみに堺において最初に行われた防空演習は、1934年7月26日から3日間行われた「近畿防空演習」である(小葉田淳編集『堺市史 続編 第2巻』堺市, 1971, p.481.)。
- 10) コロナ禍前の令和元(2019)年度には、堺市内の76の小学校から5,836人の児童が、「図書館見学」として各館を訪問した(『令和2年度堺市立図書館概要-令和元年度統計と活動』堺市教育委員会, 2020, p.23.)。
- 11) 日本図書館協会『近代日本図書館の歩み 本篇』日本図書館協会, 1993, p.246.
- 12) 同上, p.248.
- 13) 『堺市科学振興会要覧』(堺市立中央図書館に昭和16年版から19年版まで所蔵あり)
- 14) 小葉田淳編集『堺市史 続編 第2巻』堺市, 1971, p.934-935.
- 15) 『回想のなかの図書館』で描かれる他のエピソード同様、この憲兵事件もいつの出来事か書かれていない。前段の津田事件の一審の有罪判決が出たのが、1942年5月のことであるから、その頃のエピソードであると推測される。ただし津田左右吉は控訴し、その後、時効により免訴となっている。
- 16) 小葉田淳編集, 前掲14), p.1068-1077. なお、田島の「宿院通」は、同書において「戦時下の街頭風物の移りかわりを描いて出色」として全文が転載されている。
- 17) 堺市立中央図書館『堺市立図書館100年史』堺市立中央図書館, 2016, p.7-8.
- 18) 科学教育研究所は、現在、堺市中区にあるソフィア堺内の教育センターの事業のひとつとして引き継がれている。科学振興会の後身の財団法人堺市科学教育振興会も、近年になって堺市の外郭団体の見直しにより法人として解散するまで存続していた。
- 19) 小葉田淳編集『堺市史 続編 第3巻』堺市, 1972, p.37-38.
- 20) 同上, p.349.